

猿舞

長唄

全詞章

杵屋六三郎 述

本名題「三升猿曲舞」

別題「兵古猿舞」

〔ウタイ〕猿が参りてこなたの御知行

まさる目出度き能仕る

踊るが手元及びなき、水の月とる猿沢の、池の小波悠々たり、指手引手の末広や

月にたとへし止観の窓

此方のお庭を見あぐれば、片破月の宵の程

可愛可愛とさよへ、だまして置いて

松の葉越しの月見れば、暫く曇りて又冴ゆる、あすは上手物舟が上手

重たげもなくおよる君よの

船の中には何とおよるぞ

苦を敷寐の楫枕

晩の泊は御油赤坂に

吉田通ればナア二階から招ぐ而も鹿子の振袖が

奴島田に丈長かけて、先のが品やる振り込めさ

手際見事に投草履、ありやんりやありやんりや

こりやんりやこりやんりや、粹な目元にころりとせ仇物め

とめてとまらぬ恋の道馬場先退きやれ

色めく飾の伊達道具

昔模様の華麗奴、これかまはぬの始なり

まりの庭にも猿の神、厩の猿の馬れき神

猿と獅子とは文殊の侍宿、時しも開く冬牡丹、花の富貴の色見へて、栄ふる御代とぞ祝しける